

日本ケニア学生会議
第 19 期活動報告書
前半



Japan Kenya Student Conference
The 19th Official Report

目次

序章	2
・創設者挨拶	
実行委員長挨拶	
・団体紹介	
第1章 第19期概要	8
・実行委員紹介	
・テーマと概要	
・開催までのスケジュール	
・本会議スケジュール	
・今後の予定	
第2章 活動報告	11
・事前活動	
・ゴミ箱プロジェクト	
・本会議機関訪問	
・本会議分科会	
・本会議シンポジウム・文化交流	
・その他ケニアでの活動	

序章

日本ケニア学生会議創設者 挨拶 後藤千枝

第19期報告書刊行にあたり、皆様方にご挨拶と御礼を申し上げます。

日本ケニア学生会議は国際社会の発展と平和に貢献するため、日本とケニアを中心に両国社会の相互理解・国際化、日本・ケニア・アフリカ・さらに世界情勢への関心の高まりに対する対応、人づくりなどに対する国際交流・協力、言葉を変えればまさに新たな文明の創造を築いている団体だと言っても過言ではありません。

日本ケニア学生会議創設以来、年間を通して実施されている国内活動の他に、本会議参加のため、実に合計117名以上の大学生実行委員たちが日本からケニアに渡航し（在日中国人学生3名含む）、173名を越すケニア人大学生実行委員たちの中から32名が来日しています。第19期日本ケニア学生会議本会議が予定通りケニアで開催でき、また、全員、テロや事故に巻き込まれることなく、病気になることもなく無事に帰国できましたこと、実に感極まるものがあります。

今年の本会議ケニア開催にあたり、日本ケニア学生会議の基盤を強化し、より発展させ、さらに来期20周年成功のためにも過去2年度同様、従来とは異なるケニアでの本会議の形をとりました。さらに日本ケニア両国の実行委員たちが共同で環境関連のプロジェクトを考案、実施し、将来へと繋げていく予定です。本年度も、実行委員たちは頑張って本会議自体は成功させたものの、今後の課題も幾つか残っていますし、また、今期の年間の活動を通しての反省点も多々あります。本年度も、日本側実行委員の数が過去の3分の1から4分の1程度で、いくら人数よりも質が大事だとは理解しているものの、ケニア側でのリクルーティング同様、日本でもリクルーティング活動に力をいれてくれたらと思います。ましてや、来期は20周年、4年ぶりの日本開催を目指していますので、綿密な計画を立て行動あるのみです。

日本ケニア学生会議は、事前活動・本会議・事後活動の3本柱で一年が成り立っています。ところが、ここ4年ほど、本会議の日数を含め、日本ケニア学生会議が色々な意味で縮小し簡素化されてしまっている部分、今後、団体として一丸となり改善していかなければなりません。

さらに、日本ケニア学生会議は助成金を頂き、公的な機関からも支援していただいている

という、まさに社会からの応援で成り立っている団体です。日本ケニア両国の実行委員たち、そして、日本ケニア学生会議は団体としても自分たちの活動の成果を社会に還元する義務があります。日本ケニア学生会議に入る際の抱負文などが政治家でいうなら公約だとすると、果たして、各実行委員たちは、自分たちが掲げた公約に関して、また、日本ケニア学生会議が掲げる理念のもと、きちんと職務なりを遂行できているのか、有言実行し公約を守っているのか、この部分の報告と反省をもしっかりする必要があります。社会にでたら給料というものは働いた対価に支払われるもの。ところが、人材育成という名目で、さらに実行委員たちを通して日本とケニアの将来に投資という形で、学生実行委員たちには社会からの応援がついてしまいます。仕事をしなければクビになる会社と異なりペナルティーがないボランティア団体だからこそ人間の真価が問われるのですが、ケニアと日本側の実行委員たちがこのことに甘んじてしまわぬよう、団体のルールやシステム自体も今後は改善し、よりベターな形にせねばと肝に銘じている次第です。

この本会議実現にあたり、日夜努力し続けた学生諸君の情熱と実行力にあらためて感服すると共に、ここまでくることができたのも、当団体をご支援してくださっています多くの皆様方のおかげでもあります。外部の支援者の皆様方に感謝するとともに、内輪のことで恐縮ですが、日本ケニア学生会議、第1期から関わってくれた過去の実行委員たちすべてにもありがとうという気持ちで一杯です。みんなが実現させたいという強い思い、行動力で、何でも可能になるのです。

物質はやがて消えていくもの。残るのは精神、魂。国家の生命は、その物質的業績で存続するのでは決してないはず。その国が生み出した卓越せる人物によって存続するのであると思います。まさに、21世紀を担う、無限大の可能性に満ちた日本ケニア学生会議の大学生たちは国家の財産でもあります。学生たちが、ますます実りある有意義な会議を行い、これからも皆が一丸となり、霊的にも進歩した魂の巨星として、よりより社会、世界、未来を築き、歴史を動かしていってくれることを願ってやみません。また、国家の財産である学生たちを支えていくのは、私たち社会人の役目でもあります。

重複して恐縮ですが、每期繰り返しお伝えしていることですが、この日本ケニア学生会議、私のみが創設者ではないはず。当団体の活動に携わってきました学生一人ひとり、そして関係者の皆様方もが日本ケニア学生会議と一緒に創り上げている創設者なのだとは認識しております。いよいよ来期は節目の20周年。「第20期日本ケニア学生会議」を成功させ、50年、100年と継続を目指したいと考えておりますので、今後も今まで同様、日本ケニア学生会議の関係者であります皆様方の御協力、御助言、御理解を賜るよう、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

この崇高な日本ケニア学生会議という活動が永遠に継続されることを願ってやみません。

Let's take action TOGETHER for a better society, a better world and a better future !!!

19 期実行委員長挨拶

はじめまして、日本ケニア学生会議 19 期実行委員長を務めさせていただきました田中菜由子と申します。今年の JKSC19 期は来年 20 周年に向けて団体をより一層盛り上げ、発足当初のような情熱溢れる活動を行うことを目標に邁進して参りました。様々な制約のため日本側 4 人という少なめの実行委員の数ではありましたが、中心的活動であるケニアでの本会議を無事に開催できたことは大変喜ばしく、また誇りに感じております。これらはひとえに団体関係者の皆様、国際協力基金の方々、そしてケニアメンバーのお陰であり、感謝の念が絶えません。

アフリカに足を踏み入れたことのない 4 人の日本人学生の驚きと葛藤、そして現地での出会いから来る感動や喜びは以下に記す通りです。何も分からない状態から始まった 19 期の活動は決して真っ直ぐなものではなく、団体の歴史に照らし合わせると特別輝かしいものでもなかったかもしれません。しかし私達 4 人のメンバーにとって掛け替えのない、人生の糧となる経験となった事は間違いありません。互いに学び、作り上げることで様々なことを感じ、行動し、議論を交わしたこの経験を日本とケニアの関係促進の為に活かす、JKSC の根であり幹であるこの信条は団体発足当初から約 20 年、脈々と受け継がれてきた思いであるのだろう、と振り返ると感じます。しかし、私達の JKSC としての本当の活動はこの報告書では終わりません。JKSC で得たものを次は如何に二国間関係に活かすか、アフリカ大陸との関係に活かすか、そしてひいては国際社会の一員としてどう活かすか、それを考えるスタート地点として 19 期活動の軌跡を本稿に綴りたいと思います。

平成 30 年 9 月
日本ケニア学生会議 19 期実行委員長
田中菜由子



↑ Giraffe Center の前で民族衣装を着て JKSC ポーズ



↑ サファリの地で JKSC ポーズ

団体紹介

概要・活動理念

日本ケニア学生会議（以下 JKSC）は、日本ケニア両国の大学生により構成される、非営利・非宗教・非政治的の学生団体である。社会的な利害関係からは比較的的自由である大学生という立場を活かした活動と各学生の知識の共有を通じて、日本とケニアの架け橋となること、活動で得た成果を社会に還元することを目指している。

沿革

1999 年に後藤千枝氏によって設立された。第 1 回本会議は 2000 年にケニアにて開催され、現在に至るまで両国において計 18 回の本会議を開催している。

運営

毎年実行委員長、副実行委員長が選抜され、メンバー数により諸部局（財務局、会計局、学術局、広報局、渉外局等）が開局される。なお第 19 期は財務担当実行委員、広報担当実行委員が選抜され、その他の運営作業は実行委員全員により行われた。

活動内容

活動は通常は 1 年を通して行われ、1 年間の集大成として本会議が開催される。年間を通じた活動としては本会議に向けた日本国内のミーティング、ケニア側とのオンラインミーティング、関連イベントの参加などが挙げられる。また合宿ミーティングが行われることもある。

本会議とは、両国実行委員会が行動を共にし、事前に定めたテーマや活動内容に沿って共に学ぶ期間を指す。年に 1 度、両国が交互に開催国となることが原則とされる。両国の共通の関心事について分科会を開催し、相互の状況を理解した上で討論を行い、両国、そして二国間の未来を共に構想する。また現地企業や非営利団体などへの機関訪問、文化交流などを通して様々な視点からの学びを行う。本会議のせいかはシンポジウムにて社会へ発進する。

第1章 第19期本会議概要

実行委員紹介

実行委員長 東京大学教養学部教養学科国際関係論コース所属 3年 田中茉莉子
副実行委員長 東京大学教養学部教養学科国際関係論コース所属 3年 由地莉子
広報担当実行委員 東京工業大学環境社会理工学院建築学系所属 2年 櫻井千尋
会計担当実行委員 早稲田大学文学部中東イスラームコース所属 2年 ウルフシェイン

ケニア側代表メンバー

Mureti Theuri (University of Nairobi)
Josphat Machagua (University of Nairobi)
Abdiaziz Sharawe (Strathmore University)
Museo Vanessa (Strathmore University)
Everlyn Kamau (Kenyatta University)

テーマと概要

<テーマ>

JKSC では団体の理念「将来の日ケニア関係に資する両国の参加学生同士の協力関係の深化」を大目標として、委員の興味関心に応じて各年具体的な本会議のテーマを設定している。第 19 回の本年度は、「ゴミ問題」をテーマとして設定した。これは、ケニア側からナイロビにおいて最も身近で重要な問題としてゴミ問題が挙げられたためである。また、日本側委員も、国際的な問題に関心があるメンバーが集まっており、国連の SDGs などでも注目されている途上国のゴミ問題への関心が高かった。

<活動の概要>

具体的な活動は①対話事業と②ゴミ箱プロジェクトに分けられる。

①対話事業～機関訪問、分科会、シンポジウム～

機関訪問：JICA、日本大使館、ETA、A&K など日本とケニアの協力推進に大きな役割を果たしている機関を両国学生で訪問し、ゴミ問題についてお話を伺うと主に、ゴミ問題に限らず両国が協力できる分野・方法などについてもご講演いただき、その内容を踏まえてゲストを交えて議論を行った。

分科会：学生同士で就職事情や教育問題など関心の高いトピックについて意見交換を行った。

シンポジウム：JKSC の紹介、ケニア滞在中の議論の内容の紹介、日本文化体験を行った。

②ゴミ箱プロジェクト

お話を伺うだけではなく、ゴミ問題について具体的なアクションを起こそうという思いから、廃棄されたペットボトルからゴミ箱を作り、ゴミ箱にゴミを捨てるという習慣を促すプロジェクトを行った。

開催までのスケジュール

12月	引き継ぎ
1-3月	ケニア代表団とのミーティングを交え事業内容を決定
4-6月	渉外活動(助成申請、ケニアでの訪問先への依頼、事前ヒアリングの依頼)、事前勉強会 (JICA など関連機関へのインタビュー、ケニア大使館訪問)、分科会ディスカッション
7月	事前調査
8月	プロジェクトに必要な資材集め 本会議開催

本会議スケジュール

8月9・10日	移動
11日	株式会社 ETA 訪問 ストラスモア大学訪問
12日	Giraffe Center, Elephant Orphanage 見学 ナイロビ大学にてゴミ箱作成
13日	サファリ体験 大使館訪問 ナイロビ大学にて分科会開催 メンバー御宅訪問
14日	JICA 訪問 A&K 訪問
15日	シンポジウム
16・17日	移動

今後の予定

9月	報告書完成、リクルーティング、1ヶ月経過記録（その後継続）
10-11月	20期コアメンバー決定 引き継ぎ ケニア側との第20回会議全体の予定決め 助成金申請開始
12月以降	渉外活動、本会議スケジュールの詳細決定、アポイントメント、事前勉強会など本会議に向けた準備
2019年12月	第20回本会議開催

第2章 活動報告

・事前活動

19 期では、ケニアにて本会議を開催する予定であったため、開催に当たっては入念な事前活動が必要であった。しかしながら、今期のメンバーは皆多忙でなかなか全員の都合を合わせてミーティングを定期的実施するのはとても難しかったため、オンラインでのミーティングを合わせて実施することで補完した。

はじめの方は実施にあたっての意識のすり合わせや、実施内容の検討・スタディがメインであったが、その時点で資金の目処がついていなかったために、本当に本会議が開催できるのかというのが最大の課題であった。そのため、最初にやるべきは資金の確保であるという結論に至った。メンバーそれぞれで意見を出し合い検討した結果、国際交流基金様からの助成金を予算の一部として組み込むことでなんとか本会議を開催できそうだと分かり、航空券やホテル代を含んだ予算草案を作成し、国際交流基金様の助成金プログラムに応募させていただいた。結果的には助成していただくことができ、本会議の開催が無事に遂行できたのだが、申し込み段階で航空券はすでに予約してあったため、本会議が開催できるかどうか不安感の中々拭えなかった。

しかしながら、そんな中で JKSC の OB・OG の方々が内容の進捗について心配して、報告会を開催してくださった。皆さんご多忙な中で東京大学にて集まり、今までの JKSC の活動や個人個人の経験について改めてお話ししていただくことができた。19 期まで続いた JKSC の歴史の中でも、私たちの知らされていなかった内容や、ごく最近までの活動とは一線を画す先輩方のご活躍について知ることができ、大変参考になった。

また、ケニア側のメンバーとの話し合いも本会議の開催には欠かせなかった。ケニア側のメンバーたちとは主に Whatsapp を通してオンラインでの話し合いをした。今回はケニアのゴミ問題についての話し合いが活発に行われていたために、ケニアのゴミ問題について話し合うなかで、ケニア側からゴミを使ってゴミ箱を作るという提案を頂いた。内容については別項で述べるが、ケニア側のメンバーで情報収集などが積極的になされていたことなどから、現地にてこのゴミ箱のプロトタイプを作成することにした。

その後は、日程調整や予算調整、ケニア側メンバーとの連絡など含めて、現実的なプランを詰め、出発に向けた最終調整を進めた。

・ゴミ箱プロジェクト

計画段階では、ゴミの分別を促すデザインを考案して作成する予定であった。しかし事前の調査の結果ナイロビ市ではゴミ収集・埋立の段階であらゆる種類のゴミがまとめて廃棄されていることがわかり、現在のシステム下では捨てる段階で分別を促すことの意義が少ないとの判断に至った。ナイロビ市の現状は、ゴミがゴミ箱にさえ捨てられておらず路上に遺棄されている。そこで今年度は遺棄されているペットボトルからゴミ箱を作り、ゴミ箱に捨てるという習慣を促すことから開始することにした。材料のペットボトルとワイヤーはケニア人学生が準備し、両国学生で設計・作成しナイロビ大学の構内に設置した。ゴミ捨て用のポリ袋をゴミ箱にかぶせて、ゴミ捨ての時はポリ袋ごと回収できるシステムにした。



大学内でゴミを燃やして処分している



完成したゴミ箱



本会議機関訪問

【株式会社 ETA 渋井様訪問】

株式会社 ETA は、アフリカにおける環境事業とサービスを行っている会社である。具体的には、土壌・堆積物・水質・大気騒音調査や廃棄物管理、エネルギー事業、農業、衛生事業など非常に多岐にわたる。また、今の所はケニア・タンザニア・ウガンダ等東アフリカを中心に事業を実施しているが、セネガルやガーナ等の東アフリカ諸国や南アフリカでも事業を行う計画がある。これらの事業は、現地の政府や官公庁や JICA 等の機関との連携が不可欠であるため、各種機関との打ち合わせの設定等の仲介業務も行っている。今回は主にケニアのゴミ問題についてお話しいただいた。ケニア等の発展途上国におけるゴミ収集の現状は、日本におけるそれとは大きく異なっており、各家庭からゴミを収集して処理場に持っていき焼却等の処理をする、と言った仕組みは作られていないという。その代わりに、各家庭ではゴミを自分たちで燃やしたり、民間のゴミ回収サービスを利用したりするのだという。しかしながら、ゴミは最終処分場に運ばれてもそのまま埋め立てられる(オープンダンピング式という)ため、強い悪臭や浸出水の汚濁化、可燃性メタンガスの発生等の問題が生じているという。この問題の解決に向けて、ETA では「福岡方式(Fukuoka Method)」というゴミ埋め立て技術の導入を計画しているという。福岡方式とは、1975年に福岡市と福岡大学が共同で開発した準好気性の廃棄物埋立技術である。低コスト、簡便かつ環境に優しい技術であるため、2011年には国連の「クリーン開発メカニズム(CDM)」の新たな手法として認定されている。また、渋井様とお話しでは、環境やゴミ問題に対する考え方の違いを感じた。株式会社 ETA ではビジネスとして事業を行っているため、事業の実現性や、現地の人々のメリット、継続性をより重視していることが読み取れた。何よりも、渋井様は現地の人々との直接の交流を行うこと、現場に直接赴くことに重きをおいているのだという。(櫻井)

【大使館訪問】

大使館では JKSC14 期の OG、新広子様をご担当くださった。大使館訪問には Josphat (UN), Theuri(UN), Vanessa(SU), Abudullahi(SU), Emma(SU)が参加した。大使館で学んだこと、考えたことは以下の通りである。

・日本とケニアの協力関係について

Josphat により質問されたこの問いについて新様は日本はケニアと比較して車や電子機器などの技術が発達している。しかしケニアにおいては ICT システム、特にモバイルペイが日本より発達しており、この二つを組み合わせることによって良いビジネス関係が築け

るのではないかと、というお話があった。また Josphat 他学生を交えたさらなる議論においてはケニアにおける車の約9割が日本車であること、完成品としての車には多額の関税がかけられており日本車は高いこと、ケニアの市場に出回る多くの日本車が中古であるため将来的に政府の環境規制に抵触する可能性があることから、ナイロビにおいて日本車組み立てのハブをおくことによってより多くの車を販売でき、ケニア人も新しい車を同等の値段で手に入れることができるため良いのではないかと、という意見が出た。日本の投資やビジネス進出については JICA 等そのほかの機関訪問においても積極的に議論が交わされたが、この車に関するアイデアは一定の支持を得ていた。

・環境面における日本とケニアの協力関係について

新様ははじめの担当部署にて COP21 に関わっていたという。COP 21 といえば先進国と発展途上国の溝が深まり、発展途上国の方からは差異ある責任が積極的に主張されたことで有名であるが、ケニアにおいても同様のことが言えるという。特に我々が今期取り組んでいるゴミ問題については深刻な環境破壊を起こしており、燃やすことによる大量の有害物質や CO2 の排出だけでなく、豊かな生態系への影響やゴミを放置することによる健康被害などが深刻であることが改めて確認された。その上で新様からは大使館職員の立場としてやはり ODA を通しを通した日本の技術提供によるゴミ問題の解決を望んでいるとのご回答があった。なお ODA についてはその費用が削減されていること、効果や影響力について一部で疑問視されていることなど JICA でも議論された。また、アベイニシアティブとして現在多くの外国人学生が日本に留学しているがそのことに関連して、現在では農業が中心として学ばれているが環境問題についても積極的に留学生の受け入れを行うことによって間接的に環境問題への貢献を果たせることも話された。

しかしながら日本が今後環境問題についてケニアの公的機関と協力する際に問題となってくることとして政府機関の汚職問題が挙げられた。ケニアにおいては長年お金を稼ぐ手段としてゴミ収集やゴミ焼却が行われてきた背景があり、それらを取り扱う公的機関の環境部門、ゴミ部門は汚職が横行しているのが現状のようである。

・アフリカにおける中国のプレゼンスについて

このことは田中と由地が国際関係を学んでいることから度々話題となったことであるが、新様の見解としてはまず大前提として日本と中国は途上国に対する支援や協力の仕方が異なるため比較するべきではない、とのことであった。アフリカ、特にケニアにおいては中国の存在感は明らかに大きく、街中でも中国の建設会社による建築現場を多く目にした。またサファリの時もナイロビ ナショナルパークを横断する形で中国企業により鉄道が建設されていた。そうした特にインフラに着目した中国の協力体制を踏まえ、日本としてはより細かいところでの協力体制を確保していくとのことであった。というのも JICA による青年海外協力隊の活動は長年続いておりその OB や OG はケニアをはじめとするアフリカ諸

国でグラスルーツのレベルで支援を続けている。実際に大使館職員として JKSC 5 期からお世話になっている二木様についても青年海外協力隊の OB であるとのお話があった。そうした市民レベルにおける協力関係は国家として海外支援に対する財源が減少してきている今日においても持続的に行われるものである。

さらに日本とアフリカの関係では TICAD (Tokyo International Conference on African Development) の開催が挙げられる。TICAD の開催には新様も積極的に関与されており、特に TICAD5 以降は開催頻度が 5 年に 1 度から 3 年に 1 度となったことから政府におけるプライオリティが増していることが分かるとの解説があった。

・パブリックセクターとビジネスセクターとの協力について

ビジネスセクターのみならず市民社会を含めた三セクターの協力 (inclusiveness) は開発分野におけるホットイシューであるという。というのも特に日本においてはアフリカ関係の財源が減少していることからビジネス等の民間の団体の協力が必要不可欠であり、またそうすることにより地元のニーズにより合った支援が行えるからということである。またケニア大統領による 4 つのゴール (Security, Manufacturing, Housing, Health Care) の全てにおいて日本企業の進出する余地があることが議論された。さらに上述の車工場についても再度議論された。また、ケニア学生からの意見として民間企業だけでなく大学同士の交流も積極的に行うべきであるとの意見が出た。現在日本とケニアでは学部生における交換留学協定を結んでいる大学はなく、アベイニシアティブなどの限られた機会に限定されているが、そのような留学プログラムが活性化することによって両国の学生が 2 ウェイで学ぶことができるはずだという結論に至った。またヘルスケアに関連して現在ケニアでは UN の定める人口当たりの医者的人数を満たしておらず、またメディカル教育も充実していないという。そこで日本の医療大学との交流を行うことで教員の交流や学生の交流を積極化し両国に利益の出るような関係を築いていけるはずだとの意見もあった。さらに現在ケニアにおいては人口の 6 割がスラムに暮らしているためスラムにおける住環境の改善についても日本の技術協力ができないかとの意見も交わされた。(田中)

【JICA 訪問】

JICA 様は今年度の本会議で注目した「ナイロビ市のゴミ処理」について長年プロジェクトを行っており、ナイロビ市のゴミ処理問題について行政レベルから現状・課題を把握するために非常に重要な訪問先であった。社会セクターの天目石様、水・環境部門の現地職員の Mungai 様にご参加いただき、JICA のケニアにおける活動全般とナイロビ市のゴミ処理プロジェクトについてそれぞれ一時間ずつブリーフィングと質疑応答のセッションを設けた。以下に学んだ内容を記す。

・ JICA のケニアにおける活動について

1993年に TICAD が始まった頃には、日本は世界最大の ODA 額を記録しており、政府間の協力がメインであった。しかし日本の経済・財政状況の悪化による ODA 予算の減少（現在は 1990 年代に比べて約半分）とケニアの市場としての成長が相まって、次第にプライベートセクター間の協力が増加している。JICA としても民間協力を全面的にバックアップする立場である。

日本企業がケニアに進出する上で最も大きな障害は情報の不足であるという。日本企業は専門技術を持つがケニアの市場は未知であり、ケニアへの投資の可能性とリスクを独自に評価するのは難しい。そこでケニアでの経験が豊富な JICA がベースライン評価を行い、事業案が具体的かつ実行可能であるか判断し、優良な事業案には財政援助を行う。このベースライン評価と財政援助には毎年多くの応募があるが、予算上の制約が厳しいそうだ。

ケニア人学生からは、再生可能エネルギーの分野での協力について質問があった。原子力発電については未だ国内で大きな論争になっていてセンシティブな分野であるため協力する予定はないが、地熱発電に大きな可能性を見出しているという。日本では普及が進まないが、アフリカ大地溝帯を持つケニアは地熱発電に適しているという。

また、プロジェクトの事後評価について日本側から質問が続いた。JICA プロジェクトはおおよそ 3-5 年単位で行われ、実施後にはログフレーム（もしくは Project Design Matrix）を使って評価を行う。しかし、事後評価からはプロジェクトに持続性を持たせることが非常に難しいことが分かるという。支援終了後は人的資源や予算不足に苦しみプロジェクトが継続しない例が相次ぐという。持続性の担保にはやはりリーダーシップが必要であり、現地のリーダーが問題意識を強く持ちオーナーシップを持ってプロジェクトに取り組むようにしていかなければいけないとお話だった。

中国の開発援助との差異についても伺った。ケニア滞在中に見かけたインフラ工事はほとんど中国によるもので、ケニア人学生も中国資本がいかにか広がっているかを度々説明してくれた。JICA としては、巨額の予算があり大規模インフラを造る中国の援助形態と、支援終了後もプロジェクトが継続するように人材育成など能力構築にも重きをおく日本の援助形態は大きく異なると考えているという。

印象的だったのは、ケニア人学生から JICA は開発援助を行うことでどんな利益があるのかという質問だった。この問いは経済・財政状況が厳しくなる中で外国に ODA を行っている場合なのかという、近年日本国内でも多く聞かれる疑問に通じていると思う。JICA の職員の方や両国学生が意見を述べた。日本も援助を受けてきた歴史があること、そして、協力を通じて日本ブランドや製品が浸透することや現地とのコネクションができることは日本企業にとっても利益であることが指摘された。経済発展が進んでいるケニアでは無償資金協力は減少しており、技術協力や円借款へとシフトしているという。つまり、一方的な援助

から双方に裨益する双方向の協力に変化している。JKSC としても、両国間の若い世代の人脈を築くことでこの流れに貢献できると感じた。

・ナイロビ市のゴミ処理問題について

Mungai 様はナイロビ市廃棄物管理能力向上プロジェクトに直接関わっていらっしゃる方で、現状について詳しくご説明頂いた。ナイロビ市の廃棄物管理については 1998 年にマスタープラン作成を援助、2010 年にマスタープラン改定援助、2012-2016 年にナイロビ市廃棄物管理能力向上プロジェクトの実施、問いう形で JICA は長年関わっている。ナイロビ市廃棄物管理能力向上プロジェクトではナイロビ郡政府 (Nairobi City County: NCC) 職員の能力構築とゴミ処理業者のフランチャイズ制実施がメインで行われ、2016 年に第 1 フェーズが終了後、第 2 フェーズが行われる予定であった。2012-2016 年のプロジェクトでは、幾つかの地区では収集業者のフランチャイズ方式によりゴミ分別の促進を図ることができたが、ダンドラ埋立場から遠い地区の業者はダンドラまでの輸送コストがかさむため、一度収集しても近隣地域に不法投棄することが問題になっている。しかし、現在 NCC は EU などにもマスタープランの作成を依頼するなど廃棄物処理についての政策が定まらない状況にあり、したがって JICA としては NCC の政策決定を待っている状況である。そこで当面は、キアンブ郡で準好気性埋立技術「福岡方式」を用いて環境保全に優れた埋立場建設を行っている NPO SWAN-Fukuoka の支援に注力しているという。

ナイロビ市のゴミ処理に関するプロジェクトから見えてきたのは、JICA はあくまでも政府間の協力プラットフォームである以上、カウンタパートである NCC の要請がなければプロジェクトを実施することができないということである。当然現地のニーズが優先されるべきであるが、政府のイニシアティブが弱い分野にアプローチすることが難しいのだと実感した。

日本とケニア両国の経済状況の変化にしたがって、開発援助や協力形態が大きく変化する中で、長年の経験の蓄積を持つ JICA が果たしているコーディネーション機能や情報収集機能は非常に大きいと感じた。一方で公的機関であるがゆえに、あくまでも相手国政府の方針を尊重しつつ援助を行う必要があり、NCC が鋭角なビジョンを有していないゴミ処理問題については、当面はプライベートセクターによる草の根のアプローチを続けていく必要だとわかった。(由地)

【Anjarwalla & Khanna(A&K)訪問】

A&K はケニアの大手企業法務事務所である。今回は、日本の TMI 総合法律事務所から出向という形 A&K に勤務している平林弁護士と A&K の Project & Infrastructure 部門に所属し環境法に詳しい Baru 弁護士にお話を伺った。平林弁護士からはケニアそしてアフリカ全般での業務について、Baru 弁護士からは環境やインフラ分野でのケニアの法律の現状についてご教授いただいた。ご講演や議論の内容は以下の通りである。

・アフリカでの法律業務について

平林弁護士は、日本とニューヨーク州の弁護士資格をお持ちだがケニアでの弁護士資格はお持ちでないため、主に日本企業を始めとする海外企業のアフリカ進出を支援するアドバイザー業務を行っている。アフリカで活動なさっている日本人弁護士の第一人者である。

具体的には、M&A の前に行う due diligence 実施や、JETRO の依頼によりアフリカ各国の法的分野のビジネスガイドラインの作成、クライアントである日本企業とアフリカの企業の法律や文化的差異を埋めることなど様々な業務をなさっている。特に興味深かったのは、A&K は ALN(Africa Legal Network)というアフリカ各国のローファームのパートナーシップの創設メンバーであり、英国の大手法律事務所がアフリカのローファームを次々と買収する中で独立性を保っているということである。近年、アフリカ諸国間の経済統合の動きが加速しており、進出を目指す日本のクライアント企業は、多くのアフリカ諸国の法律を遵守する必要が生じている。そこで A&K は ALN のネットワークを用いて網羅的な情報提供を行っているようだ。アフリカの現地のローファームが独立性を持って現地企業にも裨益するような M&A を手がけているのだと感心した。

また、アフリカの労働力は安くないというお話も興味深かった。東南アジアとは違って、労働法が強いこと、労働者の権利意識が強いことなどからケニアでは特に人件費がかさむという。つまり進出する海外企業は労働力を搾取するような事業形態では成功できないそうだ。一方で、労働法が強いために解雇が非常に難しく、資金流用などをした従業員を解雇することができずに困っている日本企業も多く、そのような案件担当するそうだ。

日本とアフリカをつなぐ法律業務では、両国の締め切りへの感覚の違いや、現地の法律は発展途上にあって細則・ガイドラインが不足しているため規制リスクが大きいことを挙げていた。法律が形成過程にあることはリスクでもあるが、チャンスでもあるという。法律案が提示されると A&K としてレビューをして政府に意見書を提



↑お話を伺った御二方との食事場面

出するそうで、既存の法がないからこそ先進的な法律環境を整えることができるとおっしゃっていた。

また、平林弁護士は3年半ケニアで活動されているが、その期間に日本企業は2倍に増え、ベンチャー企業の参入も進んでいると実感しているようだ。

・環境と法について

ケニアでは2017年にポリ袋の使用が禁止され、製造・販売・輸入・使用すると最長で4年の禁固刑か最高4万ドルの罰金が科せられることになった。本会議中も道に多くのゴミは捨てられているがポリ袋を見かけることはなかった。買い物をして袋はポリ袋ではなく布製の袋などになっていた。これに対してポリ袋を生産する関連業者は訴訟を起こすなど抵抗を見せているが、法律は機能しているようである。このような極端な立法は日本では考えられないため、日本人学生はある種の権利侵害や投資やビジネス進出の障壁になるのではないかと考えていた。しかし、Baru 弁護士やケニア人学生は比較的肯定的な意見を持っていた。もちろん関連業者の雇用は侵害されてしまうが、それ以上にポリ袋による害が大きいという判断が下されたならば、国民は法律を遵守すべきだという考えだった。日本ほど業者の利権が確立していないために政府の権限が強く、国民もその判断に合理性を見出しているのだと感じ、先進国の感覚で権利侵害を唱えるばかりではいけないと感じた。ポリ袋の例は、法律の執行(enforcement)のフェーズがうまくいった例として評価されていた。

対照的に執行に問題を抱えている分野も多いそうである。とても身近な例として、A&Kのオフィスが入っているOvalというモールの隣のモールが、数日前から急に取り壊されていることが挙げられた。このモールは川沿いに商業施設を建設してはいけないという規則に違反した建築であり、National Environment Management Authority(NEMA)が取り壊しを命じた。しかし長い間放置されていた中での急な判断であり驚きが広がっている。どう良いの案件は4000件ほどあるそうだ。このように環境ガイドラインの執行がきちんとなされないことは多くあるが、政府がイニシアティブをとると執行が強まるようである。特に環境ガイドラインの遵守についてはNEMAのモニタリング能力が不足しており、事業者が提出する報告書ベースでの判断で、調査員の派遣などはできていない現状があり、執行を強化するのが難しいそうである。

平林弁護士のA&Kへの出向はスタンフォード大学留学中に会ったケニア人の友人の紹介がきっかけだそうだ。海外進出を目指すTMIと日本企業のクライアントを増やしたいA&Kのニーズが一致して出向が実現したという。このような人脈ベースで、社会的にインパクトの大きいビジネスが実現していくのだと実感し、JKSCで育てている人脈を大事にしようと思った。

環境面で法律が果たす役割は非常に大きく、先進的な立法を促しつつも、執行能力とのバランスに留意しなければ法律が形骸化してしまうと感じた。(由地)

本会議分科会

ナイロビ大学で行った分科会は、体調不良によりウルフと櫻井をホテルに残し、日本人学生は田中と由地のみでの活動となった。当初の予定では分科会形式でグループに分かれたディスカッションを行う予定であったが、日本人学生が2人と少なくなってしまったため全体でのディスカッションに切り替えた。議論の内容は以下の通りである。

・教育

まず身近な話題として教育についてディスカッションを行った。はじめに大学制度の違いについて話された。ケニアではアメリカと同様にカレッジとユニバーシティがあり、成績の良い学生だけユニバーシティに入る、という制度であるという。また公立と私立でもかなり違いがあり、ストラスモアとナイロビ大学を見学することによって見つけることもできた。学費の面では公立の学費がほどであるのに対し、私立はその倍のほどであることがわかった。多くの地方の学生は公立の大学に通い、大学内の寮に住むが、特にナイロビ大学は10万人も学生がいるため部屋が限られており、家計の厳しい人から優先的に入寮できる制度となっているようである。また日本の大学においてはほとんどの大学生がアルバイトを行うが、ケニアにおいては放課後はスポーツや勉強に集中することが多く、アルバイトを行うのは一部の学生のみであるという。ケニアでは英語とスワヒリ語が教育現場では公用語となり、大学においては英語を話すためヨーロッパや英米からの留学生は比較的多いようである。また東アフリカでもっとも発展した国として他のアフリカ諸国からの留学生も多いという。この日は大学のキャンパス内においてキャリアフォーラムが行われていたが、ケニアでは現在若者、特に高等教育を受けた学生の就職率の低さが社会問題となっている。この問題についてはケニア渡航前、19期のテーマを決定する際にもオンラインのチャットアプリを使って議論をした内容であるが、特に文系学生の就職は非常に困難であり、就職できずに大学院に進学する学生も多数いるとのことである。

・国際関係

このことに関しては特に19期ケニア学生代表のTheuriが国際関係、人類学に興味があることからディスカッションが行われた。まず日本人学生の関心事として中国の存在が挙げられた。現在ケニアにおいて日本人と韓国人の人口は同じくらいで、その倍以上の数の中国人が暮らしている。中国は国家の政策的にアフリカに積極的に進出しており、ナイロビにおいてもそれは例外ではない。多くの建築物が中国企業によって建設され、多くのインフラ設備が中国企業の手によって造られた。ケニア学生としては中国企業がそのようにインフラを整備することは良いことであるが、それはケニア企業の成長を促すような仕組みにはなっていないため長期的な雇用の創出には繋がらないこと、市場におけるケニア企業を圧迫している場面があること、特に建築について中国の支援に依存しすぎていることなどが

ら徐々に自立する必要があるとの意見が多数であった。また財政的にもこのような状態を続けることはできないとの話であった。さらにい日本との協力について話されたが、それは大使館での議論と同様の内容であったため割愛する。またケニア人学生から北朝鮮をはじめとする東アジア情勢についても質問があった。日本人学生としては北朝鮮とアメリカが接近していること、以前Jアラートなどの警報が複数回鳴ったこと、戦後賠償金のこと、朝鮮半島非核化に対する日本の立場、そして今後の情勢について自らの見解を述べた。ケニア人学生は遠い日本や東アジアのニュースにも精通していた。さらに最後にアフリカ大陸の中でのケニアの位置付けについて話された。ケニアは現在、アフリカの GDP 成長率においては第5位であり、南アフリカと並び大国の一つである。他のアフリカ諸国はケニアを見習い経済発展を目指した。しかし国内に目を向けるとスラムの存在や環境問題、若者の失業率など社会問題は多く存在することが確認された。

・宗教

続いては宗教についてである。ケニアにおける宗教の割合はイスラム教が2割、キリスト教が8割である。ナイロビ市内には多くのモスク、教会が存在していた。またキリスト教については植民地を通して入ってきた文化であるが、それ以前の伝統的なアフリカ民族の宗教、伝統派との接触、融合が見られるため欧米におけるキリスト教は若干異なるという。日本人学生としては我々の多くが無宗教であること、しかしながらクリスマスや正月は祝うこと、宗教というよりそうした行事は文化として受け入れられていること、そして伝統的には日本は自然崇拜であり神道が存在することなどを話した。またケニア人の名前の特徴としてキリスト教徒のケニア人は英語名、アフリカ名、アフリカ名と3つ連なることが特徴的である（例：George Ochieng Ochieng）が、これはキリスト教徒として洗礼を受けたあと自分で決めたり家族が決めたりするものであるという。これはアフリカならではの。なお、この名前については後ほどアフリカ人類学を専攻している

Theuri から、洗礼とは本来名乗る名前を名付けるものではなく、ケニア人に英語名をつけるのは植民地支配の名残であるとの話があった。そうした考えから Theuri 本人は一つ目の名前である Stephen という名前を自己紹介では言わない。



以上のようなディスカッションを行なった後はナイロビ大学のメインキャンパスツアーを行なった。大使館の訪問やディスカッションが長引いたため日が暮れてしまい、当初のルートを回ることはできなかったようであるが、講義棟や食堂、アドミニストレーション棟などを見学することができた。ナイロビ大学は広大であり、建物も高層のものが多い。近くには五つ星のホテルや国立博物館があり、人類学の授業が博物館で行われることも多いという。また授業は週に5つ程度であるが一つのコマで3時間あり、日本の大学（例えば東大教養学部の場合は週に平均12コマ、一コマ105分）と比べると授業形態がかなり異なることが伺える。また以前大学においてテロがあったことや、アフリカ諸国においては突然のストライキが珍しくないことからセキュリティが頑丈であり、一つの建物に入るたびに事前に荷物検査とセキュリティチェックがあった。また大学構内に入るにも事前にレジストレーション番号（外国人はパスポート番号）と車のナンバーを届け出る必要があった。キャンパスツアーの目的の一つとしてJKSCをナイロビ大学の公式団体として承認を受け、メインキャンパスにおけるゴミ箱の設置の許可を得ることがあったが、残念ながら時間の関係でアドミニストレーションは閉まっておりその日は伺うことができなかった。（田中）

本会議シンポジウム・文化交流

日本とケニアの架け橋となることを掲げる JKSC の活動の中で、両国の文化を発表・体験する機会となるシンポジウムは非常に重要である。JKSC のケニアメンバーはアニメや漫画などの日本文化を入り口に日本に興味を持った人が多く、文化のソフトパワーの大きさを感じさせられる。シンポジウムには JKSC メンバー以外のケニア人学生も招待し、文化交流を行うとともに、JKSC の持続的な活動のため、活動内容の紹介を行い JKSC のメンバーシップ拡大を図った。

シンポジウムは大使館で朝 10 時からに開始予定であったため 8 時 30 分に集合した。Josphat は相変わらずの punctual な性格のため 15 分前には大使館に到着していたようである。9 時ごろ準備を始め、大使館の広報センターから浴衣を男女 2 着ずつ、けん玉を 4 つ、習字セットを 2 つお借りし、さらに持参の習字セットとお菓子(飴、うまい棒、ハッピーターン、ハイチュウ)を配置した。また由地は浴衣を、田中はケニアの民族衣装を着た。しかしながら準備万端となった 10 時になっても学生はあまり訪れず、結局 10:20 に開始した。Josphat が学生に 9 時集合と言っていたため 20 分の遅れで始められて良かった。No hurry in Africa も 5 日目になるとあまり驚きはなかった。参加者数は事前の JKSC メンバーの尽力により最終的に満員の 45 名で行うことができた。

シンポジウムの司会は田中で行い、はじめに大使館の牧野様より開会のご挨拶を賜った。次に田中から JKSC についての紹介をした。内容に関しては前日に聞いた Theuri の意見も取り入れたものとなった。次に由地とウルフから機関訪問の説明と学んだ事を発表し、ケニア側メンバーよりゴミプロジェクトについての発表があった。その後質疑応答の時間を設けたのだが、ここでも内容について細かい質問があった。その後櫻井から日本文化の紹介の発表を行ったあと、会場後方に設置したけん玉、習字、浴衣着付け体験のお菓子の試食会を実施した。文化体験に当てられた時間は 1 時間程度であったが、全員とても興奮した様子で喜んでおり、大成功であった。けん玉はとても難しく皆苦戦していたが、お菓子はあっという間に売り切れ、浴衣も全員が代わる代わる着て写真を撮っていた。習字コーナーでは一人一人の名前を当て字で見本を書き、自分で半紙に書いてみる、という形式をとった。皆漢字の意味を尋ねてきたり、何種類も書いたり各々楽しんでいただようである。ストラスモア大学の人達は日本語を学んでいる学生もおり、自分でカタカナを書いてみたり知っている漢字を書いてみたりという様子もあった。皆自分の書いたものを満足気に持ち帰っていった。文化体験のあとは来年の 20 期日本開催に向けて Josphat より閉会の挨拶があり、一本締めで締めくくった。

日本側では準備の段階でイメージがあったものの、広報センターの物品貸し出しが前日までご回答を得られなかったこと、プレゼンテーションの作成時間が限られていた事などなら不安も多かったが、成功裏に終わったと評価して良いであろう。やはり大学同士の交

流が JKSC に限られているためテレビやインターネットでしか見てこなかった日本の文化に初めて触れた学生達はとても喜んでおり、文化交流の重要性を実感した。前日まではあまり JKSC の活動に積極的ではなかった学生もシンポジウムを機に来期に向けてグループに参加し活動していく意思を持ったようであり、リクルートの面においても成功であった。これらの成功の裏にはケニアメンバーの努力があった。Theuri や Josphat をはじめとするコアメンバーが一人一人に呼びかけ参加者を募ったこと、限られた時間の中でプレゼンテーションにまとめ発表してくれたことなど感謝が絶えないシンポジウムであった。またほとんどの学生とはこのシンポジウムを持ってお別れであったため、短い間であったが寛大に受け入れてくれた学生に感謝の言葉を述べた。司会の感想としてはやはり Jambo! や Asante! Karibu などスワヒリ語を織り交ぜることによってケニア学生が盛り上がってくれたことは良かったと思っている。また時間通りに撤収まで終わられたこと、参加者の学生が JKSC の活動を理解し日本文化の知識を得て帰ったことなどは今後とも末永く大使館の方にお世話になる上で重要な成果を得ることが出来たと考えている。(田中)



着物体験の様子



けん玉を説明する櫻井



オーディエンス席から見守るケニア側メンバーと参加者

その他ケニアでの活動

【移動（日本→ケニア）】

19 期目となる日本ケニア学生会議の本会議を行う会場であるケニアの首都ナイロビには香港、バンコク、アブダビを経由していくことになる。トランジェットの回数が非常に多いものとなっているが、それは金銭的にも余裕のない学生としての立場上、航空券の値段を抑えるためである。

当時は台風 13 号の影響もあり、飛行機の出発時間が 6 時間ほど遅れた。しかし、香港でのトランジェット時間に余裕があったため問題なくバンコク行きの飛行機へと搭乗手続きをすることができる、はずであった。しかし、この後多くの災難に見舞われることになる。全ての始まりは香港発バンコク行きの飛行機の出発時間が 1 時間半ほど遅れたことだ。バンコクでのトランジェット時間が 2 時間弱を予定していたため、この遅延により私たちがバンコクにてアブダビ行きの飛行機に乗れない可能性が浮上した。遅延して出発した飛行機がバンコクに到着した直後、グラントスタッフの案内のもとアブダビ行きの飛行機へと誘導される。残された時間が非常に少なかったため、グラントスタッフにできるだけ早く走るように言われ、バンコクの広い空港の中を 15 分ほど走った。無事飛行機に乗ることはできたのだが、ここでさらなる問題が浮上する。私たちの預け荷物がアブダビ行きの飛行機に積まれないという事実を聞かされた。さらに、複数の航空会社を利用した旅程であったため、各航空会社の連絡に問題が生じ、私たちの荷物が現在どこにあるのかわからないという状況になった。アブダビに到着後エティハド航空のスタッフに所在を訪ねたところわからないと言われるのみであり、不安は一層強くなった。ケニアに到着後、係員にメールアドレスを渡し、所在がわかり次第連絡をしてもらえるようお願いした。ケニアに到着した翌日に航空会社からの連絡があり、11 日の 14 時 10 分着の便に乗っているとのこと。無事、荷物は私たちのもとへと戻すことはできたが、トランジェットでのデメリットを改めて思い知らされることになった。さらに、トランジェットの際はかなり余裕をもって旅程を組むこと大切であると痛感した。8 月 9 日は移動時間がその全てを占めることとなったが、その中でも学ぶことの多い非常に良い経験となった。(ウルフ)

【Strathmore 大学訪問】

Strathmore 大学は学生数約 5000 人程の私立大学で、ケニア国内の主要な大学の 1 つである。今回はキャンパス内の建物を見学した後、JAPAN CLUB の方々と会議室にて交流会を行った。今回見学させていただいた建物は Strathmore Student's Center だ。一階には学食や購買があり、それらを囲むように吹き抜けの上層階があり、上階には intel、SUMSUNG、Safaricom、Oracle 等の連携企業とのラボや、学生用のクラブ室、空いてる廊下のスペースにはパーティション付きの机が並び自習スペースとなっていた。これらの

企業のラボでは、学生たちが大学でする研究が直接的に企業の事業に結ぶつくというものである。Strathmore 大学はケニア国内最高峰の私立大学だと現地学生たちが言っていた通り、各種施設や学生用のスペースがとても充実している印象を受けた。ここで案内してくれたのは、JAPAN CLUB というクラブの皆さんだ。彼らは日本に興味があり、日本語を学んでいるという。案内を受けた後は、この JAPAN CLUB の皆さんと会議室にて交流会を行った。交流会ではスライドを用いて、ケニアの文化や生活についてプレゼンをしてくださった。ケニアの若者が聴いている音楽や、ケニアの料理について現地の人はどう思っているかなど、ネットなどの文献で知る知識とは一風違った内容が知れた。また、彼らは日本の大学にも興味を抱いており、留学生はどれくらいいるのかや、どういった授業が行われているのか等の情報を交換した。改めて実際に現地の方々と交流する事の意義が見出せた。（櫻井）



↑アフリカのダンスを教えてもらう櫻井

【Giraffe Center, Elephant Orphanage 見学】

12日は日本ケニア学生会議の本会議において最も重要な取り組みの一つであるゴミ箱の作成に取り掛かる日であった。ナイロビ大学での作業は13時からの予定であったため、午前中は、ケニアにおける観光資源の理解のために時間を割くことにした。まず、早朝6時に起床をし、7時にホテルを後にし、Giraffe Centerというキリンの飼育をしている施設へと向かった。この観光名所ではキリンと触れ合うことができるため、多くの観光客を見受けられた。特に西洋系の人々が多い。市内では西洋系の人々を多く見かけることはないが、このような観光地においては現地の人々よりも圧倒的に多いという状況になっている。Giraffe Centerの後はElephant Orphanageという親を無くした象を保護する施設に向かった。ここでは非常に小さな象を見ることができ、その小さな象の姿を見ると、感傷的な気持ちになる。多くの観光客が押し寄せ、象にストレスを与えないために観光できる時間は11時から12時の1時間に限定されている。（櫻井）

【サファリ】

13日は公式な予定の合間を縫ってナイロビ ナショナルパークにてサファリ観光を行った。朝早くに出発したため朝食は近くのガソリンスタンドに併設されているコーヒーショップにて軽食を購入し車内ですませた。サファリでは車の天井が空いて立って見学することができた。またドライバーのオチエンさんが動物について詳細にガイドしてくだ



さり、約4時間満喫することができた。オスのライオンこそ見ることはできなかったが、キリンに始まり白サイ、メスライオンと子ライオン、カバ、バッファロー、インパラなど多くの動物を間近に見ることができた。オチエンさんによるとナイロビナショナルパークはサファリができる国立公園の中では小さい方で、見られる種類が限られているようだ。またシティに面している部分は全て電気フェンスで覆われているが、南側は柵がないため、かつてはここからマサイマラまで冬に動物が大移動をすることもあったようだ。しかし現在は地球温暖化により動物たちはナイロビにとどまることができるようになったと説明があった。またごくたまにサファリから動物が抜け出すこともあり、その場合は動物は殺されてしまうようだった。キリンに関しては前日のジラフセンターとはまた異なるキリンが見られた。ダチョウの求愛ダンスやジャックルの狩りのシーン（もっとも実際に捕らえるまでには至らなかったが）も見ることができ、貴重な体験ができた。

ナショナルパークの中には象牙やサイの角の非買運動として大量の象牙、角が燃やされたスポットがあった。ここでは車から降りて見学することができ、JKSCでも以前活動を行った社会問題にも目を向けることができた。なおナイロビナショナルパークは面積が小さいため像はいないようである。サファリは観光として訪れたが、広大な自然と人間の共生というケニアの基盤となる部分を感じることができ非常に良い体験となった。はるか彼方まで広がる地平線や山々、ナイロビのシティを背に暮らす動物達に目を向けると自然と共に生きることの豊かさを感じることができた。

ちなみにサファリの後のお昼はホテルの隣にあるローカルなレストランで食べた。残念ながら櫻井はこの時サファリにおける激しい車揺れと寒さにより体調不良となりお昼は同

席しなかった。レストランでは調理したバナナを主食として食べ、おかずとして牛肉の煮込みと伝統的なケール系野菜を食べた。由地は牛肉の代わりに牛の腸を食べ、ウルフはバナナの代わりに米を食べた。またオチエンさんはウガリとケールと小魚を食べた。小魚を一口もらったが、日本の佃煮のような味がした。オチエンさんはそこで初めてウガリの食べ方を教えてくださいました。ウガリはそのまま食べるのではなく、手で適量とった後ケールや小魚をとってウガリと揉みくっつけることで一つのボールとして食べるそうである。オチエンさんは「ウガリは味がしませんが、みんな大好きです」と言っていた。バナナは個人的には主食として食べたのは初めてであったが、トマトベースのソースで煮込まれており固めのイモのような食感と味であった。ホテルの隣に位置していることもあり、地元の客に混じってホテルの従業員もそこで食事をしていた。ローカルフードを食べることができてとても嬉しかったが、これを機にウルフをはじめ田中と由地の3人は下痢に苦しめられることになった。(田中)

【13 日夜メンバー宅訪問】

ナイロビ大学を出た後は 19 期ケニア側代表の Theuri のお姉さんのお宅に伺った。前日ヤギを食べた店にて彼から夕食のご招待を頂いたためである。櫻井とウルフは相変わらずの体調不良であったため、田中と由地、Josphat とオチエンさん、他ナイロビ大学生 2 人で訪問した。お姉さんのお宅はナイロビ郊外にあり、少し標高の高い坂道に面したアパートメントの一室であった。中に入ると日本の形式のように靴を脱ぎ、スリッパ(ビーチサンダル)を履いてお部屋にあがった。部



(↑御宅にて食事を終えて談笑中の写真)

屋の様子はアフリカならではのピンクや黄色のカラフルなおうちで、ソファに囲まれたリビングに通された。リビングのとなりにあるキッチンではお姉さんと Theuri が料理を始め、お通しとしてオレンジを頂いた。食事の前に手を洗う文化があり(伝統的には手で食べるため)お手洗いを借りたが、中国製であり住宅も中国企業による建設が目立つことが分かった。Theuri は普段は大学の寮で暮らしているが、週の何日かはこうしてお姉さんのお宅に帰り家事のお手伝いをしているという。リビングではケニアにおける男性の家事分担についての話題となった。ナイロビ大学の 2 人はできるならば家事はしたくない、という意見であり、それはケニアにおいての多数派であるようだった。後の話によると Theuri の家庭はお姉さんが双子の兄がおり、真ん中に一人、そして Theuri も男女の双子であるため、男子で

あっても家事を手伝うよう教育されたようであった。

完成した料理は千切りキャベツの炒め物、モキモ、挽肉とグリーンピースの煮込み、アボカドであった。まずキャベツはケニア全土で食べられる定番のおかずである。日本のそれと同様である。モキモとは麦や豆、芋、グリーンピースなどを混ぜたペースト状、マッシュポテトのような食べ物である。これは前日空港に荷物を取りに行った際の Theuri との雑談で家族皆での食卓の際に食べるものとして話があったため、食べられて嬉しかった。特に Theuri の部族でよく食べられるものでありナイロビ市内のレストランで外食するような料理ではない家庭料理である。アボカドは日本のそれと比較すると 1.5 倍ほどの大きさがあり固め、甘さ控えめのデザート感覚のものであった。生で半分に切った状態で皿に乗った。ケニアでは招待された場合はその食事は全て食べ切ることが礼儀であるため皆綺麗に食べた。食事はどれも日本人の口に合うものばかりでとても美味しかった。食事の間は日本とケニアの食べ物の違いについての会話が主であった。また終始テレビがついていたが、それはアメリカの番組であった。食事の後はケニアティーを頂いた。ケニアティーはブラックティーを鍋に入れミルクで煮出し、砂糖を加えた後沸騰したらこしながらポットにいれ、マグカップに満杯になるまで注ぐのが伝統であるようだ。また、アフリカの他の国では女性が男性に跪いてサーブし、飲み終わるまで待機するようであるがケニアではもうそうした伝統は残っていない。しかし Theuri によるとケニアではその紅茶を朝晩飲むため、奥さんは旦那さんのために朝早く起きてお茶を用意し、旦那さんの帰宅前にもお茶を用意するのが伝統であるという。一人暮らしの彼もまた 1 人で毎日お茶を飲むと言う。部屋に複数いる場合は通常年齢順にお茶を渡す。お茶は日本でいうロイヤルミルクティーのような甘さでとても美味しい。しかしオチエンさんによると近年ケニアでは糖尿病の罹患率が増えており、社会問題になりつつあるという。そのためオチエンさんはほとんど砂糖を取らない。また Josphat も砂糖には気を遣っており、白い砂糖はブラウンシュガーに比べて加工工程が長く化学物質が多く含まれるため好ましくないという。ケニア人の間でも健康ブームが来るのはそう遠くなさそうである。

食事を終わると日本人側から招待のお礼として歌舞伎手拭いをプレゼントした。そのあと、お姉さんのカーナビが日本製で日本語しか話さないため使えないとのことであったため設定変更を試みたがかなわなかった。車はマツダだった。

この日（13 日）は全体的にサファリや家庭料理を通してケニアの暮らしについて理解を深める日となった。特にご家庭に招いて頂いた事はただ単に学生の団体として交流するだけでなく、心から友人として受け入れられて頂いているという気持ちがしてとても嬉しかった。お姉様も快く迎え入れていただき、ケニア人の暖かさに触れられた夜であった。またご家庭にお招きいただいたことによりケニア学生とも親密度が深まり良い機会となった。大学におけるディスカッションにおいても活発に意見が交わされ有意義な時間を過ごせた。

（田中）

【ショッピング】

シンポジウムのあとは出発前最後のショッピングを楽しんだ。ショッピングにおいてもナイロビの文化を感じることができたのでここに記す。

まずはじめにヒルトンの土産屋に再び訪れて各々が土産を購入した。その後歩いて数分のところにあるスーパーマーケット(11日に訪れたのと同じところ)に行きケニア紅茶とケニアコーヒーを飲んだ。買い物楽しんでいるとテストを終えた Theuri が合流した。スーパーでの買い物はすぐに終わったが、スーパーの中で様々な商品を見ながらケニアの生活について色々話を聞くことができた。ケニアの野菜や果物は基本的には日本と変わらないが、違いは先日購入したココナッツやケールを日常的に食べること、伝統野菜があることなどである。またウガリの粉やコメは本当に種類が豊富であり家庭によって好みがあるようだ。しかもコメに関してはどの種類も JICA 訪問の時に学んだ mweo 産であった。生活雑貨にも違いがあり、スポンジの形や文房具の種類は少しずつ日本と違った。日本にいてもアフリカ由来のあらゆる食材が手に入る事を知り Theuri や Josphat はとても驚いた。

スーパーのレジ袋はもちろん布だが、それは1枚40円と有料であった。こうした徹底度合いも日本との違いであると感じた。

スーパーから車をとめているところまでは歩いて数分であったが、学生だけで歩いたため少し緊張した。Theuri や Josphat のすぐ隣を歩いていたので特に何もなかったが、途中なにかと話しかけてくる人もおり、安全面で気を抜いてはいけないと改めて感じた。

Josphat はその後皆にジュースを奢ってくれた。また、オチエンさんから全員にお土産のプレゼントがあった。1週間という短い間であったが、毎日共に過ごす事で友情が深まり、シンポジウムを終えたという達成感と共にとても充実した気持ちになった。(田中)

【移動 (ケニア→日本)】

帰りは16日14時10分ジョモケニヤッタ空港初の飛行機でアブダビ、香港を経由し、羽田へと向かう予定である。当日の朝は特にケニア人学生との分科会は予定していないため朝食をとった後、10時にホテルを去る。Nairobi University の学生2人に空港まで送迎してもらうことができた。この二人の学生はケニア側の中心メンバーであり、今回のシンポジウムなどでも非常にお世話になるなど、全ての工程を共にした。空港にて日本からのお土産とメッセージカードを渡した後に感謝の気持ちを述べ、20回期の東京開催を約束し、別れることになった。

14時10分発の飛行機に搭乗すべく、チェックインをし、ゲートへと向かう。しかし、搭乗時間になっても飛行機は現れない。また飛行機が遅延していたのだ。タクシー運転手の言葉が思いだされるが、「まさか飛行機までもが」、と悩まされ、行きのトランジェットでの悲劇がまたしても訪れる不安に駆られる。アブダビでのトランジェットの時間は1時間40分と

今回の旅程を通して非常に短いものとなっている。アブダビにつき急いで香港行きの飛行機へと足を運ぶ。グランドスタッフに私たちの荷物は大丈夫か、と尋ねたところ、大丈夫と言われ少しばかり安心した。最終的に香港のトランジェット時に荷物を確認することができた。香港でのトランジェットを無事に終え、羽田空港に到着。ようやく日本に無事に帰ってくることができ、安堵の気持ちでいっぱいになった。(ウルフ)